答辞

　桜の蕾が膨らみ始め、春の訪れを感じる今日のよき日。私たちのために、このように盛大な卒業式を挙行していただき、ありがとうございます。新型コロナウィルスが猛威をふるい、いつもと違う形での卒業式です。ですが、私たち卒業生は、立派に整えられた式場
や、先ほどからいただく激励のお言葉に、参加してくださった方々、ここにはいない在校生のみなさんの温かさを感じています。本当にありがとうございます。紫におう法皇山脈のもと、この川之江高校で過ごした三年間は、あっという間でした。義務教育を終え、初めて自分で選んだ道。知らない人も多く、最初は戸惑いました。けれど、その一方で、新鮮な空気に、胸弾む春でもありました。

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」サン＝テグジュペリは、『星の王子さま』の中で、こんな言葉を残しています。移り変わりの早い時代に、目に見えない大切なものって、何だろう。私たちは、それを三年間探し続け、育ててきたのかも知れません。

　高校生活最初の行事は、大洲での集団宿泊研修でした。転覆し、笑い合ったカヌー。煩悩を取り払い、精神統一した座禅。ウォークラリーでは、長い道のりを班員同士で励まし合いながらゴールしました。ケガをした友達を、背負って帰った人もいました。時を守る感覚を身に付け、仲間を大切にする。私たちの学校生活はそこから始まりました。

　２年生といえば、修学旅行。関東班はディズニーランドに浅草、国会議事堂やスカイツリーを訪れました。都会の刺激を受けて、貴重な経験ができました。私は沖縄班でした。一番の思い出は、伊江島での民泊体験です。沖縄ならではの人の優しさ、温かさに触れました。昨年、ニュースとなった首里城にも訪れました。１年後の火災は、本当に悲しかった。「常にあるものなど何もない」と感じました。旅行では、平和記念資料館やひめゆりの塔にも訪れ、平和の尊さを学びました。４日間でしたが、強く印象に残る旅でした。

　２年生の冬は、進路決定の一歩を踏み出す時期です。学年集会で、３年生ゼロ学期と教えていただき、最終学年になるのだ、という自覚が生まれました。
　今日、この場で会うことはできませんでしたが、在校生のみなさん、もう、桃の花咲く３月です。私たちの卒業後から、みなさんの進路の挑戦は始まります。また、部活動も大きく羽ばたく時です。川之江高校は明治創立の伝統ある学校です。「厳にして慈」。「厳しさと優しさ」を持った、強く誇り高い姿が、私たちの理想像です。残された時間を、勉強や部活動で、悔いのないように過ごして下さい。一緒にいた時間は短かったけれど、とても楽しかったです。直接言えないのは残念ですが、遠くから皆さんの活躍を見ています。本当にありがとう。

高校３年は、責任と挑戦の学年です。部活動は集大成の年。私はバトン部でした。技が決まらず、情けなく思う日もありました。だから、うまくなりたくて一生懸命頑張った。三年生が引退すると、振り付けや後輩の指導と、役割が増えて不安が大きくなりました。改めて、先輩たちの偉大さを感じた瞬間です。その姿に追いつきたいと、私たちはがむしゃらに練習しました。７月末、全国大会で精一杯の演技をし、３年生は誇らしい気持ちで引退しました。振り返ると、部活動では、もめごとは日常茶飯事で、練習も苦しくて苦しくて、しょうがなかった。でも、仲間と会わなくなると、一気に寂しくなりました。部活動は、終わってから、一緒に過ごした仲間や先生、時間のかけがえなさに気付くものです。生みの苦しみや、いさかいを超えた先に、私たち３年生は目に見えない何かをつかみ取りました。

高校生活最後の体育祭。令和元年度は、創立 111 周年にあたります。「『1』生懸命・『1』致団結・ナンバー『1』」をスローガンに、これが最後の自己表現と、三年生は奮い立ちました。アーチや応援練習では、最初はなかなか人が集まらず、不安になることもありました。また、振り付けを覚えられなかったり、声が出なかったりして、喧嘩になったこともあります。しかし、次第に練習の中で「絶対に勝つ」という闘志が沸き上がり、各団みんなが熱くなっていきました。

迎えた本番。紅蓮の炎を身にまとう鳳凰、とぐろを巻いて睨みをきかす黄龍、嵐を呼び息まく蒼き虎。各団のアーチが、私たちに気合を入れてくれました。体育祭開始のピストルが晴天に響き、赤光、黄道、青嵐の順にかしらを披露する入場行進で幕が開きました。応援合戦ではどの団も気迫充分。演技できなくなった人の分までと、心を一つに頑張りました。優勝を目指して流した汗と涙。川高の夏はどこよりも熱い夏でした。終わった後、健闘をたたえ合いながらも、どの団も「自分たちが一番」と胸を張って言えたのは、この上ない喜びです。

体育祭の後は、受験モードに突入しました。進学、就職など夢に向かって努力する姿勢から、仲間の新たな一面を見ました。自分の全てを注ぎ込み、ひたむきに勉強する姿はかっこいいものです。私が受験を終えた後も、秋も冬もずっと、放課後、長机にかじりついて勉強を続けていた仲間たち。その姿に、自らを律する力、妥協のない強さを見つけました。

先生方、勉強面でも生活面でも、いつも私たちを支えて下さり、本当にありがとうございました。苦しくて逃げ腰になる私たちに、時に厳しく、時に優しく指導して下さいました。先生方のお陰で、私たちは今日、旅立ちを迎えます。これからは、自分で自分を律していかねばなりません。その厳しさを、今、改めて感じています。

お父さん、お母さん。この１８年間、わがままを言って反抗したり、素っ気ない態度で困らせたりして、ごめんなさい。それでも私たちが辛い時は察してくれて、美味しいご飯を作って

くれて、ありがとう。言葉では表せないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。家族の存在がなければ、今の私はいません。産んでくれて、今まで育ててくれてありがとう。離れてしまうけれど、安心してもらえるように、頼られる大人になります。

私たちは、この三年間で様々な「目に見えないかんじんなこと」に気付きました。
けんかできる誰かがいること。自分のだめな所を言ってくれる親友がいること。叱ってくれる先生や家族の存在。成功や挫折から何かを学びとること。謙虚でいること。他人が困った時に助けられるか。自分が困った時に、他人が助けてくれる人間性があるか。喜びは一人で味わっても、たかが知れたもの。みんなで喜ぶことこそが真の喜びであること。そして、人が抱える悲しみに気付くこと。
私たちが勉強とともに学んできたのは、「豊かな心」や「真実を見つめる目」でした。物や人を大切にし、自分を、命を大切にする。こうやって、毎日心を耕すことは、仲間や先生、家族の存在なしに、できることではありませんでした。

眠い目を擦りながら通った学校。教室に入ると、おはようの後に、自然に始まるテレビの話。たまに退屈な授業。はしゃぎ合った休み時間。放課後の部活動の元気な声。当たり前の日々が、もう明日からはありません。みんな離れ離れになり、全員が集まることは二度とないでしょう。辛いことがあっても、側に川高の友人はいません。今後は、一人ひとりが置かれた場所で、しっかりと根を張り、花を咲かせていかねばならないのです。それは楽しみですが、さみしくもあります。離れたくない。ですが、私たちは新たな一歩を踏み出さなければなりません。川之江高校の仲間に出会えたこと、一緒に過ごした毎日は私の宝物です。ここで学んだ生き方を、それぞれの道で表現していくことが、私たちの成長の証です。

「今日という日は、残りの人生の最初の日。」
かけがえのない時間をありがとう。またいつか、笑顔で会いましょう。